KUTANism
産地のオンラインミュージアム

LIBRARY #05

秋元雄史がゆく、九谷焼の物語

第五話

【前編】受け継がれた古九谷のDNAが花開くまで ～古九谷から吉田屋まで～

「九谷焼ができるまで」を訪ね歩いた第一話から第四話。
今回は「能美市九谷焼美術館｜五彩館｜」の館長とともに、”九谷焼の歴史”を旅します。

「LIBRARY　秋元雄史がゆく、九谷焼の物語」とは

2020.10.24～12.20まで開催された「産地のオンラインミュージアム　KUTANism」の主要コンテンツの1つ。陶石から絵付け、そして料亭まで。九谷焼はいかにして生まれ、使われてきたのか。KUTANism全体監修・秋元雄史が、自らその現場に足を運び対話する中で、九谷焼の物語を再発見していく連載シリーズです。

Starting out as raw pottery stone, they are painted, and eventually served at traditional ryotei restaurants. Just how exactly did such Kutani ceramics come to be, and come to be used? Through this mini-series, rediscover the origins and evolution of Kutani ceramics, with KUTANism supervisor Akimoto Yuji as your on-site guide.

＼ WEB版はこちら ／

第五話

【前編】受け継がれた古九谷のDNAが花開くまで
～古九谷から吉田屋まで～

九谷焼が出来上がるまでの“現場”を訪ね歩いた第一話から第四話に続き、第五・六話では九谷焼の焼き物としての歴史の“骨格”を掴んで眺めてみましょう。

今回は、“九谷焼の歴史を聞くならこの人！”という九谷陶磁器史研究家であり、能美市九谷焼美術館｜五彩館｜館長の中矢進一さんに、九谷焼の通史をナビゲートしていただきます。前編では九谷焼の出発点である「古九谷」から、古九谷復興としての吉田屋窯までをご紹介。

中矢進一さん

能美市九谷焼美術館｜五彩館｜館長。九谷陶磁器史研究家として長年に渡り九谷焼の歴史を研究して来た第一人者。1977年石川県加賀市教育委員会、加賀市美術館学芸員、石川県九谷焼美術館副館長を歴任。2006年全国5会場巡回特別展「古九谷浪漫 華麗なる吉田屋展」監修。15年特別展「大名細川家の茶席と加賀九谷焼展」（永青文庫）監修。北陸新幹線金沢開業記念特別展「交流するやきもの九谷焼の系譜と展開展」（東京ステーションギャラリー）監修。会期中上皇上皇后両陛下行幸啓に際し「ご説明役」を務める。共著に『ふでばこ（九谷焼特集）』、『九谷モダン』などがある。

色絵磁器・九谷焼の誕生

秋元：中矢さん、お久しぶりです！本日はよろしくお願いします。
今回中矢さんにレクチャーしていただきたいのは、「九谷焼」ってみんな言うけれど、一体何なんだ、というところ。どういう歴史を辿ってきて、どれくらいの時系列の中で様式があるんだろうと。できるだけザクっとしたところをうかがいたいと思います。

中矢：ザクっと、ですね（笑）。

秋元：ええ、まずは初心者向けに。理解への第一歩として、360年間の九谷焼の流れを教えていただけたら。

中矢：わかりました。そうしましたら、この美術館には古九谷から再興九谷・近代九谷とこれまでの流れが分かる作品が揃っているので、実際にモノをご覧いただきながらお話しさせていただきましょうか。

秋元：いいですね！ぜひお願いします。

古九谷窯があったのは、加賀国江沼郡九谷村（現在の加賀市山中温泉九谷町）。この近くで陶石が発見された（九谷陶石）。

中矢：まず導入として、九谷焼の窯がどのように分布していたか分かる地図と、通史が一望できる年表がこちらにあります。

秋元：九谷焼の歴史はおよそ360年というけれど、実際はどのように考えたら良いでしょう？

中矢：私は明暦元年に古九谷の窯が始まったという説を採用しています。なので、1655年が起点だと思っていただけたら良いと思います。ですから360年ちょっとですね。

秋元：いわゆる“古九谷”と呼ばれる時期はどの辺りまでですか？

中矢：明暦元年に、加賀国江沼郡九谷村（現在の加賀市山中温泉九谷町）で古九谷の窯が始まってから、九谷の二号窯が廃窯になるまでの約50年間ですね。

そもそも九谷は、前田藩の金山だったんですよ。
金山開発をしているときに、山師だとか鉱物を見れる人がいた。
そこで磁器の原料も期せずして発掘されて「お殿様、お恐れながらも、金銀の他に陶石も採れます」と報告したわけです。

その現場監督が後藤才次郎。
その当時、色絵磁器は“金にも相当する”という価値観があったので、ならば前田藩でつくろうではないかと。
そこで後藤才次郎はお殿様の出張命令を受け、肥前有田（佐賀県）にて一生懸命磁器づくりを学び古九谷が生まれるわけです。

秋元：では、この古九谷があった50年の間に、「青手」や「五彩手」といった、九谷焼を代表する色絵様式も生まれているのですか？

青手の古九谷。青手は緑・黄・紫の三彩か、紺青を加えた四彩で器全体を塗り埋める様式。
油絵のような濃厚な彩色が特徴。「青手芭蕉図鉢」／能美市九谷焼美術館｜五彩館｜所蔵

五彩で描かれた古九谷。九谷五彩という緑・黄・紫・紺青・赤の色絵の具を使用する。花鳥風月などを日本画のように余白を残して彩る。
「色絵松鶴図皿」／能美市九谷焼美術館｜五彩館｜所蔵

中矢：そうです、いわば“九谷焼のルーツ”が古九谷から生まれています。しかし古九谷の窯はわずか半世紀の稼働で廃窯となります。藩主の死や飢饉による財政難、徳川幕府の干渉など様々な説があり、あるいはそうしたものの複合原因かもしれません。原因は判然としませんが、とにかくここで古九谷は途絶えた。
そして再び九谷焼が復活する「再興九谷」の時代は1807年に青木木米が金沢にやってきて「春日山窯」ができてからです。ここから再興九谷の窯がいくつもできてきます。

秋元：では、こういう風に言っても問題ないでしょうか？まず「古九谷」が50年間ありました、それが1710年に途絶えた。そしておよそ100年ほど間が空いて、次に来るのがもう1807年からの「再興九谷」であると。

中矢：はい、そうです。古九谷が途絶えた後も、加賀百万石の茶陶文化の中では“焼き物文化”というものは絶えずあった。けれども、いわゆる“九谷のようなもの”は再興九谷まではありません。

秋元：今おっしゃった「九谷のようなもの」とは？磁器という意味ですか？

中矢：色絵磁器ですね。焼き物文化はあっても、色絵磁器を焼く窯が復活したのは、紛れもなく、加賀藩によって招聘された青木木米（※）からになります。この人は京焼の人ですから、京焼の技術を金沢に持ち来んだ人なんです。

秋元：青木木米自身も磁器質のものを、金沢で焼いてるのですか？金沢では陶石は発見されていませんよね？

中矢：九谷村から陶石を運んで来ていたのです。

秋元：あぁ、九谷から持って来ているのですね！

中矢：それが大変だったので、青木木米の弟子だった本多貞吉が、金沢近郊で九谷と同じような陶石がないか、一生懸命探したんです。けれど金沢には陶石がなかった。

秋元：でも本多貞吉は花坂で陶石を見つけてますよね？それこそ前回、私達も原石山を見て来たのですが。これはどうやって見つけたのですか？

中矢：これはもう、本多貞吉の“執念”でしょうね。徐々に徐々に、陶石を探す距離を金沢から伸ばして行った。そして“金沢近郊には鉱脈なし！”と判断して、加賀に向かって下がっていって、やっと花坂で発見できた。

やはり陶石は白山が近くにあるところにあるわけですよ。
白山は火山ですから、火山の近くには温泉も、金も、陶石もある。
これは現代の私たちが結果的に知り得たことであって、江戸時代を生きる本多貞吉が知っていたかはわかりませんが。

とにかく、この花坂陶石の発見がなければ、九谷焼の発展はなかったんです。

秋元：すごいなぁ。執念でバット振り回してたら特大ホームラン打っちゃった、という感じでしょうか。
それにしても、加賀市の九谷でも陶石は発見されていますが、今おっしゃったみたいに「花坂陶石がなければ九谷焼の発展はない」というのは、埋蔵量という意味でしょうか？

中矢：秋元さんも現地に行ってらっしゃるのでお分かりと思いますが、花坂陶石の原石山は市街地に近いですよね。まず交通の利便性が高い。

それに比べて九谷村はものすごく急峻な谷が2つもあって、現在その谷を利用してダムが出来てる程です。
そんなところで荷台に陶石を積んで運ぶわけにもいかないので、人が背負って運ぶしかない。つまり大変な労力がかかるわけです。

ですから、再興九谷では九谷村からの陶石ではなく、全部花坂の陶石を使っています。
あと九谷は大聖寺藩でしたので、いわば加賀藩とは国が違うわけですね。
陶石をやり取りする上で、これも一つ大きかったと思います。

①春日山窯跡（1807年に青木木米がやってきて指導した加賀藩窯／再興九谷のきっかけ）
②若杉窯跡（花坂陶石が発見されたことによって若杉で設立された藩窯）
③花坂陶石（1817年に本多貞吉が発見した陶石／再興九谷以降はほぼ花坂陶石を使用）
④古九谷窯跡（九谷陶石が発見されて、加賀国江沼郡九谷村にできた最初の窯）
⑤九谷陶石（一番初めに見つかった九谷焼の陶石／古九谷・吉田屋は九谷陶石を使用）

秋元：なるほど、制作の効率性を考えるとそうなりますよね。では、再興九谷をおさらいすると、花坂陶石が見つかり、それで磁器生産が可能になった。そして若杉窯が成立したと。
しかし、陶石は花坂陶石を使うとしても、磁器をつくる“職人”は、一体どうしたのでしょう？

中矢：これは私見ですが、まず加賀藩がバックアップしていたことが大きい。
それと他産地の人とのネットワークがあったのではないか。主柱は本多貞吉ですね。

貞吉は肥前出身で京焼の青木木米の弟子であった。
貞吉が中心となり磁器窯が開窯したことを貞吉自身が直接他産地の知己に知らせたことやあるいはそれを側聞したことも考えられる。

少なくとも師の木米には伝えたでしょう。
そのことから、藩内外から加賀藩窯に従事したい職人や見習工が集まったのではないかと考えられます。

秋元：なるほど、そして若杉窯から出た職人が、若杉の外でも新たに窯を開いていくと。

中矢：そうですね。若杉から職人があちこちに動いています。
若杉窯は加賀藩の藩窯でしたからいわば“大工場”だったので、職人もたくさん育成されていたんです。

若杉窯は藩窯として“暮らし向きの生活用品”をたくさんつくったと言われる。そのため、磁器の中でも窯入れの回数が少なくて済む「染付」の器が多い。
若杉窯「染付霊獣文皿」／能美市九谷焼美術館｜五彩館｜

秋元：もともと九谷の色絵磁器の技術としては有田からきてるんですよね？

中矢：職人自身は、本当にいろんなところから来ています。江戸時代の初期は人が移動することをとても嫌って、関所も厳しかったのですが、江戸後期になるとかなり自由です。職人たちは自分のスキルを上げるために全国の有名窯業地へどんどん修行にいっていました。
本多貞吉も、元々は肥前出身です。吉田屋窯で働いていた職人の明細書を見ると、信楽や京焼の方からも来ています。当時の京焼は磁器中心でしたから、磁器をつくるなら京焼から引っ張ってくるのが一番手っ取り早いんですよね。

秋元：今のスポーツ選手みたいですね。「阪神タイガースだけど、出身は違う」というような（笑）。

中矢：確かに「うちのチームはここが弱いから、他所から引っ張ってこよう」という感覚に近いかもしれませんね。

吉田屋窯の九谷ルネサンス

中矢：さて今度は、「吉田屋」というのが1824年に、古九谷のルーツである九谷の地で窯を再興するんですね。「九谷焼」という名前もここでようやく復活するんです。そしてこのときを境に、江戸前期の古い九谷焼を「古九谷」と称するようになります。

秋元：あぁ、「九谷焼」という名前が復活するのはこのタイミングだったのですね！色絵磁器生産はそれ以前にも始まっていたにも関わらず、それまではなぜ“九谷焼”と呼ばなかったんですか？

中矢：“九谷”でないからです。若杉でつくったものは当時“若杉焼”と呼んでいました。なぜなら、陶石も花坂陶石ですし、焼いている土地も若杉ですから。この当時の古文書を見ても、吉田屋だけが自分たちの作品を「九谷」と呼んでいる。それに、吉田屋は最終的に窯を山代に移しているんですが、九谷陶石を使い続けていたこともあって「山代焼」とはせず、「九谷焼」を名乗っていたのです。

吉田屋窯「色絵紫陽花瓜文角鉢」／能美市九谷焼美術館｜五彩館｜所蔵

秋元：そうか。古九谷の“美意識”も含めて、初めて過去を振り返って検証しているのが吉田屋なんですね。
それまでは“産業”として「新しいことをガンガンやっている」という印象ですもんね。

中矢：そうです。若杉窯は加賀藩の殖産興業ですから。

秋元：“九谷”という土地に敢えてこだわって窯をつくり、改めて「九谷焼」と命名するあたりに、吉田屋の強い意志を感じますよね。ある種の“美術”として九谷焼をみている。
そういう意味で吉田屋は、九谷焼におけるルネサンスを起こしているわけですね。

中矢：そうです。古九谷に憧れを持って京都から青木木米が加賀藩に持ち込んだ“美的センス”というか、“芸術を追うDNA”というのは、木米から本多貞吉に受け継がれ、吉田屋で花開くのです。

秋元：ちなみに、吉田屋のスポンサーというのは？

中矢：吉田屋伝右衛門という、大聖寺城下の豪商です。大変な文化人であり、そして“古九谷の窯の復活”を切望していた一人でした。
当時71歳だった吉田屋伝右衛門と、粟生屋源右衛門（※）と本多清兵衛（本多貞吉の養子）といった、いわば若杉の“若いもん”が串茶屋という茶屋で出会うんですね。かたやスポンサー、かたや技術がある職人。
双方が出会って「ならば古九谷の窯を復活させようじゃないか」という話になるわけです。

（※）粟生屋源右衛門…本多貞吉の指導のもと、若くして若杉窯の主工を務めた人物。

秋元：なるほど。きっと職人としても、若杉では染付を大量生産しながらも、古九谷の美意識というものにどこか憧れを持っていたのでしょうね。

中矢：確実に憧れていたと思います。あの青木木米でさえも、古九谷に憧れを持って「九谷という名陶がおたくの国にはあるでしょう。
その原料があるなら私は喜んで行きます」ということで京都から金沢までやって来ているわけですから。
“陶工の憧れの的”、それが名陶・古九谷なんです。

オリジナリティを求める精神性

秋元：吉田屋の作品というのは、青手の中でも群を抜いて評価が高いですよね。それというのは釉薬の美しさにあるでしょうか？

中矢：それがひとつ。おっしゃったように、古九谷・吉田屋の素晴らしさというのは、透明感ある色絵の具の奥深さにもあります。そしてもうひとつは“絵の上手さ”です。

秋元：あぁ、やっぱり「絵」なんですね。

中矢：絵が物凄く上手い。文化文政時代にここまで洗練されたデザインを器に与えられたかと驚くほど秀逸です。

吉田屋窯「象人物図額鉢」／能美市九谷焼美術館｜五彩館｜所蔵

秋元：その吉田屋のデザインというのは古九谷から引用していたりするのでしょうか？

中矢：それが一点もないのが素晴らしいんです。全てオリジナル。若杉の青手などはあくまで古九谷の模倣ですけど、吉田屋のデザインは完全にオリジナルなんですよ。

秋元：全部ですか!? 驚いたなぁ。“古九谷再興” と言いながらも、図柄は完全にオリジナルという。
その絵は誰が描いていたのでしょう？

中矢：鍋屋丈助という日本画出身の絵師が吉田屋に加わっているんですが、彼に「こんなものを書け」と提案していたのが吉田屋伝右衛門だった。彼がオーナー兼プロデューサーだったのだと私は見ています。
吉田屋伝右衛門は絵も描けるし和歌は詠めるし、立花もできる。
もはや彼自身がアーティストといえる程大変な文化人でした。さらには暇もあってお金もあると。

秋元：最高ですね（笑）。ちなみに吉田屋の作品には当時の“時代感” のようなものは何か反映されていたりするのでしょうか。

中矢：文人趣味というか、教養がある人にしか分からない和漢の故事や文様が描かれていたり、“ストーリー” が隠れている物が多いですね。
あとは吉祥模様などもよく使っています。きっと町人が宴会を開いて吉田屋の器で料理が出てくる、その絵柄についてその場にいる人たちは皆理解ができている、そういう時代だったのだと思います。

秋元：あぁ、当時はお金を持っている町人も多かったから、彼らが教養を身につけて、ある種それをひけらかす場というか一種の“文化人サロン”みたいな機能もあったのでしょうね。

中矢：文化文政時代は、とても良い時代でした。
それ以前はスポンサーといえば、大名や上級武士達に限られていましたが、この頃は裕福な町人たちが芸術のスポンサーになり得た時代です。
九谷焼においてもカラフルで、自由さと大胆さがありました。

吉祥文様が使われている吉田屋窯の器「福寿輪花皿」／能美市九谷焼美術館｜五彩館｜所蔵

中矢：とにかく、吉田屋伝右衛門が71歳のときに決断していなかったら、あの「吉田屋窯」は生まれていなかったんです。九谷で2年、山代で5年。たった７年という短い期間でしたが、その功績は非常に大きいです。

秋元：ちなみに、どうして吉田屋は人気があったのに7年でつぶれてしまったのでしょうか。

中矢：吉田屋伝右衛門はご隠居様で身代と総合商社のような家業は息子に譲っていましたが、働き盛りの50歳で先立ちます。落胆した隠居も後を追うように息子の死の3か月後に76歳で亡くなります。
父と祖父を一時に失った孫は二十歳代でしたが、家業の経営が思うに任せず重荷だったようです。

身代や家業の権利のほとんどを売り払い、吉田屋窯を宮本屋に譲渡した翌年、28歳で亡くなります。
オーナー一族の立て続けの不幸は、閉窯の大きな要因です。もし、息子がご隠居ほどの年齢まで生きておれば、初期投資を回収して経営も軌道に乗ったことでしょう。
京上方での評判は高かったのですから。
少なくともたった7年でつぶれることはなかったでしょう。

秋元：たった7年間という短い期間だったのに、吉田屋窯はこれだけの作品が世に残っているというのは、器の価値がわかる人たちが、大事に扱ってきたということなんでしょうね。

中矢：オリジナリティを追求する、そういった作品こそが後世に残るということを、歴史が証明しています。
私が当時の職人の気持ちになると、きっと真っ白なキャンパスの前に立ったアーティストと同じ気持ちだったと思うんです。
当時としては大変貴重な白磁を前に「さて何を描こう」と。古九谷もそうです。
金儲けのためではない、彼らにとっての九谷焼はもはや芸術、アートだったのだと思います。

～～～～～～～～～～～～～～

その後、焼き止めとなった吉田屋窯を譲り受けた宮本屋窯をはじめ、明治に入るまでに7つの窯が開かれます。
それ以前も含めると13の窯が、それぞれの窯ごとに様々な技法や様式を生み出しながら「再興九谷」の時代を引き継いでいきます。
次回の後編では、明治以降の九谷焼の様相と、そして窯を越えて活躍する名工の出現について語ります。
【後編へ続く（11/27公開予定）】

KUTANism

主催：KUTANism実行委員会　共催：能美市、小松市　協力：石川県九谷窯元工業協同組合、石川県陶磁器商工業協同組合、九谷上絵協同組合、九谷焼団地協同組合、公立小松大学、こまつKUTANI未来のカタチ、小松九谷工業協同組合　後援：北國新聞社、認定NPO法人趣都金澤

クタニズム実行委員会事務局
〒923-1198 石川県能美市寺井町た35（能美市役所 産業交流部 観光交流課内）MAIL：info@kutanism.com

クタニズム

https://kutanism.com